

フランシス・イライザ・ホジソン・バーネット作
佐藤志敦訳

わたしのロビン(後半)

My Robin, by Frances Eliza Hodgson Burnett, Translated by Shinobu Sato

わたしはテーブルに向かってお話を書きながら、ロビン君がやってきて、おなじみのちいちいという声を聞かせてくれるのを待っていました。ふと目をあげると、近くのリンゴの木にとまって小首をかしげていたので、口笛とさえずりで挨拶し、もちろんいつもどおり楽しくおしゃべりしようとしてロビン君が降りてくるものと思いました。ところが、頭をひよいと愛想よくかしげ、ちいちい返事こそしたものの、そこから動かなかったのです。

「どうしちゃったの？」と、わたしは呼びかけました。

「さあ、降りていらっしやいな、おチビさん！」

それでも、ロビン君は降りてきませんでした。枝の上をちよつと行ったり来たりしてさえずりましたが、同じところにとまっただまなのです。そこで、めったにないことなのですが、わたしのほうが立ち上がってロビン君のところへ行きました。彼を見つめているうち、奇妙な気分になってきました。トゥイーティー（わたしが名付けたロビン君の秘密の洗礼名です）のように見えますし、首をかしげてばたと羽を動かし、さえずるようすも似ています。でも、別のコマドリがトゥイーティーになりすましているのかしら？ よそ者なの？

でも、見ず知らずの小鳥が、こんなふうに親しげにすることがあるでしょうか。こんなに近くまで来て、トゥイーティーそっくりの可愛らしさと優雅さでなれなれしくさえずりかけてくるなんて、ありえないことでした。狐にでもつままれたような気分でした。なんとかして枝から降りてくるように誘ってみましたが、うまくいきません。わたしの言うことに耳を傾け、微笑んで尾羽を上下に振りましたが、ずっと枝にとまっただまなのです。

「わかったわ」

わたしは、とうとうがまんがでなくなりました。

「もう、あなたのことなんか信じない。おかしいわよ。わたしのことを知っている振りをしていられるけれど、本当は怖がっているんじゃない？ どこにでもいるただの小鳥みたいよ。あなた、トゥイーティーじゃないのね。偽者なんだわ！」

信じてもらえるかどうかはわかりませんが、枝の下に立って怒ったり戸惑ったりしながら、いったいどうなっているのかしらと黙っていたまあととき、どこからともなく、小

さな真つ赤な怒りの矢が　本物のトウィーティーが　羽を怒りにふるわせ、火のような勢いで飛んできたのです。枝にとまっているコマドリはやっぱり偽者で、トウィーティーは、偽物がロビンの真似をして赤いサテンのチョッキを見せびらかしているのを見つけたのです。

本当に、まあなんとという光景でしょう。北欧神話の戦士ベルセカーのような怒りを小さな体いっぱいにして、無礼な侵入者へ向かっていきます。とびかかって脚でけりつけ、翼でびしゃりと打ちすえ、つつき、ひどい言葉を浴びせて、止まっている枝から追い払いました。そして、その卑怯者が木から木へと攻撃をかわして逃げるのを追いかけて、ついにはバラの花園から追い出し　月桂樹の生け垣を越えて、雑木林のキジのねぐらまで追いついていったのです。もしかしたら、トウィーティーはよそ者の息の根を止め、わたしの眼の届かないワラビの茂みに置き去りにしてしまったのではないのでしょうか。

勝負がついてしまうと、トウィーティーはちゃんと戻ってきましたが、全身で息をつき、身体をふくらませ、血走ったような目つきはやっと落ち着きを取り戻し始めたばかりでした。テールの上に降りて、息を切らしながら乱れた羽をせわしなく整えていましたが、とつても腹を立てて、まるで納得がいかないようです。あんな奴にだまされそうになるなんて、君ってなんて間抜けなのさ？　あきれるよ。と言っているのです。

その怒りかたがあまりにすごかったので、わたしはすっかり怖くなって、血の気が失せてしまいました。そこで、賢い女性ならそうするように、ちょっと気をつかって、なんとかトウィーティーをなだめようとしたのです。

「もちろん、本当にあの鳥をあなただと思ったりしたんじゃないわ」

わたしの声はふるえています。

「どこをとつてもあなたのほうが上だったもの。チョッキはあなたのように美しくなかったし、腫だつてあなたみたいに魅力的じゃなかったわ。脚も、優雅で繊細というにはほど遠かったし。それにくちばしよ、あれで初めにおかしいと思ったの。聞こえていたでしょ？　わたしがあの鳥に偽者って言ったのを」

トウィーティーはやっと耳を貸し始め　少し落ち着いてきて　だんだん怒りもおさまってきました。そして、快くわたしの手からパンくずをついばみました。そうしているうちに、わたしたちには、このひどい事件がいったいどうして起こったのかがわかってきました。あの偽者は、こっそりわたしたちのことを観察していたのです。きっと、幸せそうなたたたちがうらやましかつたのでしょう。そして、暗くよこしまな考えが弱い心に忍び込み、あの大胆不敵な悪党はわたしをだまし、自分がただのコマドリではなくて、「あのコマドリ」　わたしのトウィーティーその人だと信じ込ませ、仲良くなろうと考えたのです。でも、偽者は外の間の世界へと追い払われ、わたしたちは再び一つになりました。

本当のことを言うと、ロビン君のやきもち焼きは相当ひどかったのです。花園のことで庭師の親方と相談することがよくあったのですが、そういうときでさえ、とても気を使わ

なければなりませんでした。親方がバラの花園に呼ばれると、ロビン君はすぐに現われたものです。

ロビン君は、わたしたちのあとをついて、草の間や、バラのつばみからつばみへと、ぴよんぴよんとびまわりました。そして、わたしたちの会話を一言も聞きもしませんでした。肥料のことやアブラムシの話に夢中になって、ロビン君のことを忘れかけたり、真剣な声になりかけたりでもしようものなら、すぐさま邪魔をしに入りました。こつちを見てよ、と。近くの枝にとまって、わたしの気を引こうと、それはもう大騒ぎだったんですよ。はばいたたり、ちいちいさえずったりして呼ぶのです。

そして、いつものとおきの手は、リンゴの木のとっぺんへ飛んで行って、とびきり魅力的な素晴らしい歌を、感動的な歌声で歌うことでした。うっとりするほど素敵だったので、自然とわたしたちはその歌に聞き入り、話題はロビン君のことへと移りました。その歌声を聞けば、意地悪なパートンのお天気のせいで落ちたリンゴでさえも、思わず微笑んでしまったことでしょう。

「おいらはここだぞって呼んでますだ」と親方はよくいったものです。

「目立ちたがり屋さね。気づいてもらえねえってのが我慢ならねえんです」

でも、ロビン君がわたしにひかれていたのは、うぬぼれが強くてほめられるのが大好きという理由だけではありませんでした。ロビン君はわたしに恋していたのです。深紅ののどをふるわせて歌う優しい歌声はわたしのものでした。その歌は、わたしのための歌でそばにだれがいるときには、決して歌おうとはしませんでした。歌ってくれるのは、バラやミツバチや太陽の光や静けさつつまれ、二人きりでいるときだけでした。

梢を揺らしてロビン君がすぐ近くまで来ると、わたしは立ち止まってささやきかけます。ロビン君はそれに答え、わたしが口をつぐむたびに、遠くから聞こえるような、この世でもっとも甘く、もっとも素晴らしい愛らしい音色でさえずるのです。わたしより小鳥の習性をよく知っている方が、こんな不思議なことを言いました。

「あれは愛の歌だよ」と。

「君はコマドリをかなわぬ恋のとりこにしてしまったんだね」

そうだったのかもしれない。ロビン君にとってはバラの花園が世界のすべてで、夏の間じゅう外へは一度も出ませんでしたから。わたしがやってきて呼ぶと、いつも違う茂みの中から現われたものでした。

ところが、秋も深まったある日の午後、わたしは見たのです。ロビン君が、この閉じた花園と広い外の世界を隔てる壁の向こうからやってきたのを。そして、申し訳なさそうに近づいてきました。わたしには、知られたくなかったのでしょつ。

「若くてかわいいコマドリのお嬢さんとお友だちになったのね」と、わたしは言いました。

「結婚しようねって、もう約束しちゃったのでしょつ」

ロビン君は、そんなことはないとわたしを納得させようとしたましたが、隠しごとがない

ようには思えませんでした。

そうです、このバラの花園の外、壁の向こうにも世界が広がっているのだと知ってしまったのです。でもそれは、すっかり夢中になるほどのものではなかったのでしょうか。わたしが来たときに出かけていることはめったにありませんでしたし、呼べば必ず応えてくれましたから。

わたしはときどき、そのコマドリのお嬢さんのことを聞いてみました。でも、本当はよくわかっていたのです。紳士のように礼儀正しくて、はっきりとは言いわないけれど、ロビン君がいちばん愛しているのはこのわたしだと。ロビン君は、わたしのたてるコマドリのような音やささやきが大好きで、ぬれた瞳でわたしの瞳をのぞき込むのです。そのようすはまるで、ほかの人には理解できない、二人だけに通じる不思議な優しさがなんであるかをちゃんとわかっているかのようにでした。

わたしは、九年間もその美しい花園のあるお屋敷を借りて住んでいたのですが、その冬、持ち主がそこを他の人に売ったので、引越すことになりました。十二月にスイスのモントルーへ行つて二、三ヶ月過ごし、三月にいったんこのメイサムのお屋敷へ戻つて、大好きな花園やお友だちに最後のお別れをしてからバラの花園を閉じようと考えました。スイスへ立つ日まで、わたしは毎日花園へ出かけました。そして、これから出発というときにロビン君を呼んで、どこへ行くのか話したのです。

こんな小さな生きものです。ほんの二、三ヶ月といつても永遠のように思えるでしょう。そんなに長い間、わたしのことを覚えていてくれるでしょうか。わたしはやっぱりコマドリではなくて、ただの人間だったのです。本当にたくさんことを話しました。わたしが戻ってきたとき、はたしてロビン君がまだ花園にいてくれるのだろうか。その思いを引きずったまま、わたしは旅立ったのです。

冬のスポーツや山の雪、そり遊びやスキーといった世界から戻ったとき、とても長い間留守にしてきたように感じました。ケント州にも雪が降って、公園やお庭はどこも真っ白でした。お屋敷に着いたのは夜でした。次の朝、赤い厚手のコートをはおると飛ぶように石敷きのテラスを駆け下り、レンガの壁が続く長い散歩道をとおり過ぎて、あの大切な場所へ行きました。白い世界では、バラの茂みはどれもくすんだ色をしてか細く、枝には葉ひとつありません。わたしは、あの木の下に立ってロビン君を呼びました。

そして、声に出さずに言いました。

「行つてしまったの？ ロビン君、あなた本当に行つてしまったの？ もう二度と会えないの？」

わたしは待ちました。今まで一度も待たされたことなどなかったのに。バラの花は散り果て、ロビン君はバラの世界から去ってしまったのでしょうか。わたしは、もう一度、呼んでみました。ロビン君を呼ぶときには、口笛でコマドリそっくりの音をたてたり、チツチツと舌を鳴らしてみたり、「さあ、さあ、いらっしやい」と早口で繰り返したりするの

です。たぶん、これが一番のお気に入りでした。

ひとつひとつ試してみました。そして、そのとき何か赤いものが芝生をさあつかすめました。バラの散歩道を横切って、レンガの壁を越え、ロビン君がそこに現れたのです。忘れてなんかいませんでした。遅すぎやなんてしなかった。ロビン君は、雪の残る枯草の上に、わたしの足もとに、舞い降りてきたのです。

本当にそうだったのです。ロビン君はただの小鳥ではなくて、「人間」だったのです。でも、永遠のお別れがもうすぐやってくるのも事実でした。とても、現実のことだとは思えなかったのですが。

あのことはあまり考えないようにしています。別れは、避けられることではなかったから。できることは何もありませんでした。わたしは、海を越えてアメリカへ、何千マイルものかなたへ旅立とうとしていたのです。深紅と茶の羽をもつ小さく温かな生きもの、のどをふるわせてさえずる小鳥の命の、なんとはかないことでしょう。黒々とぬれた瞳の奥の魂。誰にも、本当の気持ちはわかりません。でも、説明はできないけれどわたしは信じていました。わたしたちの魂は、不思議なほど寄り添っているという気がしてならなかったのです。

空気がしっとりとしたある日、わたしは、まだ花ひとつないバラの花園へ行き、いつもの木の下に立ってロビン君を呼びました。最後のお別れです。ロビン君はすぐにやってきて、わたしの目の前の枝にとまりました。

ロビン君に話したことを、「ここですべてお伝えすることはできません。けれどわたしは、心をつくして説明しようとし、彼は、あの愛の歌で答えながら話を聞いてくれたのです。わたしは、人間に話しかけるように話しました。小首を傾げたまま、一生懸命聞いてくれたので、きつとわかってくれたでしょう。わたしが遠くへ行ってしまうこと、もう二度と会えないこと、そしてそれがどうしてなのかを伝えたのです。

「でも、わたしが戻ってこなくても、あなたを忘れたからだなんて、決して思わないでね。今まで生きてきて、子どもたちを別にすれば、あなたほど誰かを大切に思ったことなんかなかったわ。この先も、一生、こんなふうになれかを愛することはないでしょう。あなたはわたしのもの、わたしはあなたのもの。いつまでもいつまでも、この愛は変わらない。さようならは言わないわね。わたしたち、ずっと一緒だった。誰よりもそばにいたわ。本当に、本当に、あなたが大好きよ。ロビン君」

そして、わたしはバラの花園をあとにしました。もう二度とあそこへ戻ることはありません。

(完)